ている．現役の人の名前もどんどん出てくる．というより，そういう人達の業績を積極的に評価紹介するものとなっている．著者が意識的にこういう書き方を選んだことが，序文やあとがきにうかがわれる．これからどういう姿勢で研究を進めるかを決めようとする人達におすすめしたい．そして同年代の私にとっては，我が計画性のなさをあらためて認識させる本である．　（金井弘夫）

□橋本光政：**兵庫県の樹木誌**　678 pp.　1995.　兵庫県林務課.　￥12,000.

兵庫県で行われた全国植樹祭の記念出版で，カラー図版372頁，本文・索引306頁より成る．図版にはほとんどすべての種類の花，果実が示され，樹皮・標本・線画・拡大写真も必要に応じて添えられている．本文はすべての種類に同じスペースを割り当て，記述は比較的簡単であるが，近頃は図鑑類が豊富にあるので，ここに植物のくわしい説明がなくてもどうということはないだろう．これと共に図版の写真と証拠標本のデータが記されている．編者が創設にたずさわった兵庫県立人と自然の博物館所蔵の標本が大部分である．研究史物語の章では兵庫県フロラに関する報文が，年代順に57頁にわたって論評されている．ここで注目すべきは，現在の知識にてらして誤認，不明と思われる記録が一々指摘されていることである．662頁にも兵庫県植物目録（1971年）について同じ指摘が行われている．先輩の業績を批判することはなかなかできるものではなく，誤認が周知のことであっても積極的に否定訂正することはまずない．その結果一度記録された誤りがいつまでも生き続け，分布記録とくに分布図に蓄積されてゆくのが現状である．最近のようにデータベース化が進むと，一度記録されたレコードを否定する手段がない．単に削除するだけでは，あとから文献記録に基づいて復活されてしまうので，はっきりした「否定レコード」というものが必要だと私は考えている．それにはこのような正誤の公表が，最も有力なよりどころとなるだろう．やりにくいことをなさった編者に敬意を表する．同様なことは，大村敏朗氏と井波一雄氏によって，新しい出版物について厳しく行われているが，私信によるものであるため周知されないのは惜しい．テキストをパソコンで利用するため，フロッピーディスクが2枚ついている．これは単にテキストを読む以外に，標本のデータを抽出することにも利用できるが，まだ抽出に便利な仕様ではなさそうである．また写真データも標本とは別の存在情報なので，標本と同様なスタイルに揃えるのがよいと思う．入手希望者は下記へ連絡されるとよい．670　姫路市田寺東町4-12-10　橋本光政．送料は近畿圏￥830，圏外￥1,030である．　（金井弘夫）

□石澤　進：**ユキツバキを指標とした植物分布**　228 pp.　1996.　学会出版センター.　￥9,500.

1980年に始まった新潟県の植物同好じねんじょ会による新潟県植物分布図集は，すでに16集に達し，県単位の分布図集として抜群の出来映えと，その中に挿入された会員によるさまざまな植物地理学的論説によって異彩を放っている．この事業の推進者である著者が独自の手法で，新潟県フロラを特徴づける日本海要素植物のエッセンスをまとめたのが本書である．典型的な日本海要素植物としてのユキツバキを基に，100種の水平垂直分布をメッシュ法によって数値的に比較した結果，分布型の異なる6群を判別している．メッシュシステムによる植物分布図は今や当たり前であるが，そういうシステムをとる理由は単なる表現上作図上の便宜のためだけではない．分布を数値化することによって，目分量ではない植物地理学的検討を可能にすることに意義がある．これは既に堀川芳雄氏が試みたことではあるが，本書によってより精密な処理の新しい方法が提示されたことの意義は大きい．これを足場に，それぞれの植物群の生理生態学的研究が進めやすくなり，日本海要素ばかりでなく，日本の植物地理の解明に指針を与えることとなるだろう．　（金井弘夫）

□コーナー E. H. J.（大場秀章訳）：**ボタニカルモンキー**　227 pp.　1996.　八坂書房.　￥2,400.

植物採集をする猿がいたということは，先輩から聞いていた．国際生物学賞を受けた著者は太平洋戦争の最中，日本に占領されたシンガポール植物園に止まり，敵側である日本の科学者と協力し

て，植物園と博物館の文化財の荒廃を防ぐ努力をしたことで知られる．植物採集猿も彼の発明だった．ブタオザルはもともとヤシの実の採取にマレー人が使っていたが，これを熱帯の高木の花や実の採集に仕込むことを思いつき，そのいきさつと猿たちとの交流を記したのが本書である．着想というものは何の脈絡もなしに浮かんだり消えたりするものだが，それを捉えて実行してしまうのはただごとではない．採集猿は今でも使っているところがあるという．専門家によるブタオザルの解説と，訳者による著者のくわしい紹介がついている．

（金井弘夫）

□我が国における保護上重要な植物種および植物群落研究委員会植物群落分科会：**植物群落レッドデータブック** 106＋1，344＋17 pp. 1996. 日本植物保護協会・世界自然保護基金日本委員会. ¥20,500.

厚さ7.5cmある．1989年に発表された植物種のRDBに続いて，植物群落についての調査がまとめられた．何らかの保護を必要とする群落が7,492件あり，そのうち緊急な対策を必要とするものは310件である．既に壊滅してしまった群落は152件に達している．調査と解析の章と群落レッドデータの章に分けられ，後の章が最も大きく，保護について何らかのコメントをつけられた群落がすべて記録されている．県別の集計表が付いているので，関係する地域の問題点を見出すことができるようになっている．資料には問題群落とインパクトの関係表がある．最後に植物種のレッドリストもついている．

（金井弘夫）

□Hiepko, P.（ed.）：**A. Engler und K. Prantl, Die Naturlichen Pflanzenfamilien Band 17a IV. Ranunclaceae.** Authors. M. Tamura, R. Hegnauer, J. W. Nowicke, J. J. Skvaria und H. Tobe. 555 pp. 1995. Dunker & Humblot, Berlin.

1897年のEngler & Prantlの著書の新版である．5人の著者が挙げられているが，形態，染色体，分布及び分類全体など，本の内容の大部分は田村道夫氏が執筆したものである．世界の40数箇所の標本室から標本を借用して，世界のキンポウゲ科を属単位で解説し，属内のsection, seriesまで異名も引用して分類し，それに属する種類を挙げている．初版からほぼ100年，内容は著しく詳細になった．また属ごとに代表する種類の全形図と解剖図が，梅林正芳氏に依って描かれていて，内容の理解に役立っている．これだけの大きな科をよく纏めたものと思う．筆者はこの科に詳しくないのでその内容について批評する資格はないが，気になる点もある．日本のトリカブト属は全部Sect. Acontitumに属さしめ，門田氏がトリカブト属のモノグラフで区別したsectionやseriesは総てその中の異名としてしまっているが，日本のトリカブト類にはいくつかの系統があると思えるので，この扱いはやや柔軟性を欠いているように思う．属内の分類は今後検討する必要があるのではなかろうか．

（山崎　敬）

□Boyce P.: **The genus Arum** 196 pp ＋16 plates. 1993. Royal Botanic Gardens, Kew. £30.

キュー植物園からの伝統的な出版物であるKew Magazine（カーチスのボタニカルマガジン）の良さを活かしつつ，さらに植物についての記述を充実させて，植物学者にとっても園芸家にとっても価値のあるモノグラフとして計画されているKew Magazine Monographシリーズの1冊である．著者のPeter Boyce博士は若手のサトイモ科研究者で，もともとがキューガーデンの出身であるため，生きた植物に特に深い理解をもっており，2人の植物画家による精緻な図版とともにアルムの魅力を十分に引き出している．アルム属は25種がヨーロッパから西アジアにかけて分布しているが，夏蒸し暑い日本では栽培が容易ではないので，あまり馴染みのない植物であろう．しかし，こうして全体を展望してみると，アルム属としての共通性の中で色も形も様々に変化しており，園芸植物として珍重されるのもうなずける．本書は植物分類の論文としても高いレベルに達しているが，身近に置いて時々めぐって見るだけでも，伝統的な植物学に裏付けられた西洋の植物趣味を垣間見ることのできる良書としてお勧めしたい．

（邑田　仁）